

社会科学における二元思考

—経営学，マーケティングのSZシステム

大 嶋 隆 雄

◆キーワード：

自然科学と社会科学 (Naturwissenschaft und Kulturwissenschaft) 二元思考 (Dual approach) 経済人 (Homo economics) 物理崇拜 (Fetischcharacter) 人間類型論 (Ideal—typus) SZ システム (Soft and Hard system) 人間の社会的存在 (Gesellschaftliches sein des sein der Menschen) 理解的方法 (Verstehende Methode) 主観的に思われた意味 (Subjektiv gemeinter Sinn) 利害状況 (Interessenlage) 日本的経営 (Japanese management practices) 組織は戦略に従う (Structure follows Strategy) コミュニケーションの「意味」 (Semantic content of Communication) 事後解釈 (Retrospective sense of making)

I 自然科学と社会科学

I-1 神学的思考からの離脱—自然科学

自然科学的思考はデカルト (1596～1650) 的思考法に始まる。中世ローマ教会的圧力のもとに発表されたデカルトの「方法序説」¹⁾ は神の存在を前提に認めながら、まず精神的問題と物質的問題とをはっきり分離することから始めた。宗教と科学も明確に分離された。この考え方はそれ以来、いわゆる科学という名のもとにおいて、経済学、心理学、社会学、経営学など社会科

学に今日まで大きな影響を及ぼしてきている。

デカルトを有名にした「方法序説」のなかの「Je pense, donc je suis: cogito ergo sum」（私は考える、ゆえに私はある）は「考えるわれ」の存在という明証的原理にデカルトを到達させた。しかし、一方で客観的自然の真なる知を理由づけるには至らない。考えるわれは、疑いの中にあるわれであり、まず、考えるわれの存在の知に含まれる有限性の自知ということを反省した。みずからが有限である以上、みずからのうちに無限な完全なものの観念すなわち神の観念がなければならない。無限完全なる神の観念は、有限不完全なわれ自身の生み出しうるところではない。故にわれわれのうちなる神の観念は、神自身によってわれわれのうちに与えられたものと認めねばならない。

ここに「われわれがある」ことから「神がある」ことが必然的に証明されることになる。同時に彼は、神を論ずる哲学について疑問をもつ²⁾

“哲学については、最もすぐれた精神をもつ人によって研究されてきたにもかかわらず、いまだ論争の余地のない事からは何一つない。その他の学問については、原理を哲学に借りるものであるから、そのようにあやふやな基礎の上には堅固な建物は建てられるはずはない”。それに対してデカルトの自然学は、

“われわれをとりまく物体、火や水や風や星などの力とはたらきを知り、あたかもいろいろな職人を使うように、それら物体を適当な用途に使うことができ、われわれ自身をいわば自然の主人かつ所有者たらしめることができる”。

そして「省察」³⁾において、

“感覚による把握は多くの点できわめて不明瞭であり混乱している。物質的事物が存在するかについては、物質的事物が純粋数学の対象であるかぎり存在することが可能である”と結論する⁴⁾

数学は、それまで、エジプトで神の存在を象徴するための神殿など巨大建築物を造るために用いられてきた。この経験から登場したのが“ピタゴラスの定理”であり、これを一般化したのがユークリッド幾何学である。ユーク

リド幾何学は建築に応用されたばかりでなく、一つの公理から定理を導き出し、複雑にからみ合った思想や概念を、石を一つずつ積み上げてピラミッドを構築するように、理路整然と、美しく体系化していくことにも応用された。

続いて、近世の西洋自然科学における原点ともいえる存在はニュートン（1642－1727）であるが、彼の最大の業績の一つ「ニュートン力学」とユークリッド幾何学の関係は深い。

ニュートンもデカルトの靈魂と物質を完全に分離する二元論を踏襲した。デカルトが神の絶対存在という第一原理に触れなかったように、ニュートンも「なぜ万有引力は存在するか」という根源的な、神学的な疑問を力学の中において扱わなかった。だからこそ徹底的に数学的力学の分野へ没入することができた。

ニュートンの力学は鉄砲の弾道学と航海術で実を結び、七つの海を支配した大英帝国の歴史的背景と密接に結びつく。

更に少し歴史を下れば19世紀後半、マックスウェル（1831～1879）の数学的「電磁気学」の論理的モデルとして使われたのもやはりニュートン力学だった。

I－2 科学としての社会学

市民社会（Civil society）なる語は、いうまでもなく中世社会の束縛から開放されて成立してきた近代の新興市民社会を意味する。イギリスのホッブス、ロックなどが用いた語である。ホッブスは市民社会は万人が万人に対して個人的な利己心をもって争う戦場（万人の万人に対する戦い——bellum omnium contra omnes）であると形容する。市民社会はまさしく自由放任の競争社会であって、内容的には欲求の体系であるといえることができる。欲求の体系とはいわゆる経済現象の体系を意味する。この欲求と満足との間に支配する普遍的合理性を明らかにすることは経済学の任務に属する。

アダムスミスの「国富論」⁵⁾の基調をなすものは利己的な人間本性であり、その中に展開されたさまざまな経済理論とその上に立つ“自由放任”“夜警

国家”的な経済政策は、いわゆる“経済人（Homo economics）的人間の仮説から切り離しては理解することはできない。この経済人的人間の道德哲学はスミスの道德哲学である。「道德情操論」⁶⁾のなかに鮮明な形で展開されている。

人間本性の理解を中世以来の形而上学的伝統から切断し、人間の心理的行動の分析に立って、その社会行動や考え方の準則ないしパターンを検出しようとするものである。その場合人間の本性として、とりわけ利己心（self-interest）および自愛心（self-love）が重要な位置を占めていた。

その際、注意しなければならないのは、スミスが「^{れんびん}憐愍もしくは同感」と名づけるものが、全能の神が人間創造のおり、人間の幸福のために賦与し給うものであるとコメントする。これは、後述するJ. S ミルの福祉国家的経済理論に結びつく。

ところで、国富論では、

真の富とは何かという点で重商主義時代の“貿易差額”や重農主義時代の“農産物余剰”と対立する。スミスはこう述べる。

“あらゆる国民の年々の労働は、国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを供給するみなもとである。またその生産物で他の国民から購入したものである。つまり、富を獲得する唯一の手段は「国民の年々の労働である」”。しかしながら、

マルクス（1818）の「資本論」⁷⁾はこうした人間の労働が「商品」として生産されると、謎めいた性格を帯びるということになる。いわゆる物神崇拜⁸⁾（Fetischcharacter）である。

“労働生産物が商品として生産されると、労働生産物が、人間に対して物と物との関係という幻像的な形態をとるようになる。「商品」は人間そのものの一定の社会関係でしかないからである。労働生産物は商品になり、感覚的でありながら超感覚的な物になってしまう”。

つまり人間疎外（Entfremdung）である。群衆の中で人間は個性を喪失する。自分たちが作ったものが、自分たちを離れてよそよそしくなり、逆に自

分たちをあらゆる方向に動かしていく。そこでマルクスの「資本論」は「商品論」から出発し、「商品」に内在している価値観を通じて、疎外のベールを一枚づつはがし、価値の実体は人間と人間の関係であると発展的に説明していく。

マックスウェーバー（1964）は社会科学における人間の相対化という課題に初めて取り組んだ。彼の人間類型論⁹⁾ (Ideal-typus) はエートス (Ehos)¹⁰⁾ 論が基礎になる。大塚久雄氏の要約によれば“人間の行動様式を類型化してとらえる場合、それを単に外側の社会的な現われとしてだけでなく、そういう行動様式を内面から支える、あるいは押し進める意識形態、とりわけ倫理意識の問題を含めて考えるのが特徴です”。

エートス論を押し進めたウェーバーは「人間類型」の実証的研究として、一種の比較社会的研究である「世界宗教の経済倫理」¹¹⁾ と題する大論文を発表したのである。その中での「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」¹²⁾ という世界的に有名な論文では、近代ヨーロッパの資本主義文化を作り出すのに力あった禁欲的プロテスタンティズムの宗教意識との関係が述べられている。そのほか東アジアの儒教的・仏教的文化圏、インドのヒンズー教的文化圏、西アジアのイスラム教的文化圏等々それぞれの支配的な人間類型が考察されている。大塚氏の結論はウェーバーの人間類型論を更に押し進め“人間類型論というのは、普遍的な人間性と個々人の個性 (personality) との中間ですぐれて意味をもつものであり、社会科学にとっては、そうした二つの極の間に成り立つ豊かな人間論こそが、将来その成立のための前提とならねばならない”¹³⁾ と示唆している。この点は、将来の社会科学にとって注目すべき見解といってよい。

社会科学としての科学的認識は新カント学派としてのリッケルト (H. Rickert, 1863)¹⁴⁾ の歴史科学の認識論に由来する。カント (I. Kant, 1724) においては歴史はまだ歴史科学としては認められていなかった。カントは自然科学の研究する自然界は先天的理性によって感覚的所与が構成されることにより成立すると考える。かかる自然界の法則的認識の可能性は自然界その

ものの成立のうちに存すると主張した（先験的唯物心論）¹⁵⁾。カントの批判哲学の立場を継承するリッケルトにとっての問題は、自然科学が成立するならば、カントの如く実在即自然界とすることによっては、歴史科学の成立する余地はなくなると考えた。自然界と歴史界は、それぞれ自然科学と歴史科学との科学方法論により構成されたもの、つまり方法的範疇によって構成されたものと考えた。それ故同一の現在の實在が視点の異なるに応じて、自然科学的对象にも歴史科学的对象にもなるというのがリッケルトの根本的な考え方であった。

すでにリッケルトの師であるヴィンデルバント（W. Windelband, 1848）¹⁶⁾ は自然科学が一般的法則を探究する学であるという意味で法則定立的（nomotetisch）と称せらるべきに対して、歴史科学は個性として記述するところに成立する意味で個性記述的（idiographisch）と称せらるべきだと主張した。リッケルトはこの考え方を発展させて、自然科学が没価値的普遍化的な方法（weltfrei-generalisierende Methode）をとる科学であるのに対して、歴史科学（文化科学）は価値關係的個別化的な方法（weltbeziehend-individualisierende Methode）をとる科学であると主張した。

II 科学における二元的思考（Dual approach）

II-1 デカルト的二元論

近世以降、西欧では宗教と物質世界を分離して考えようとした。神は宗教に委ね、物質世界は数学と結びついた。これが人間を靈魂と物質に完全に分離するデカルトの二元論である。さきに引用した彼の「省察」では、“物質的事物が存在するかどうかの問題であるが、感覺的による把握は多くの点で極めて不明瞭であり混乱している。物質的事物は純粹数学の対象であるかぎり存在することが可能である”とする。そして「方法論序説」では、彼自ら「屈折光学」、「気象学」、「幾何学」としてこれを実証した。

いわゆる神と物質の分業原理である。この分業原理の徹底によって、西欧

は近世以来、政治面のみならず科学技術面で圧倒的な優位を誇った。近世以来の東洋の低迷はこの分離が出来なかった点にある。

近世西洋自然科学の原点といえるニュートンも、万有引力について神学的な疑問を扱わなかった。しかし宇宙までに拡大されたその法則は、未知の世界を含む神の偉大な創造性を思わせるものであったに違いない。

パスカルは修道士だったが、それと関係なく数学の研究を行った。有名なメンデルの「遺伝の研究」もバイブルの研究とは分離された。この神と分離された一元化された徹底的研究だっただけにその成果は著しいものであった。

しかし最近このデカルト以来の分業的一元化が問題にされ始めている。神の存在を第一原理として疑わなかったデカルトの二元論に立ち返り、有限不完全な人間存在の認識を支える完全的存在＝神との共存システムを考えることである。神の存在は19世紀に入って必ずしもユークリッド幾何学が唯一の存在でないことを証明し始めた。宇宙の説明をする場合、細部においてはユークリッド幾何学で考えた方がよいが、宇宙全体の説明においては非ユークリッド幾何学が通用することが解ってきた。非ユークリッド幾何学の存在可能性は西欧のユークリッド幾何学的、自然科学の一元的追及の合理性に大きなインパクトを与えている。

東大作田教授¹⁷⁾は次のように言う。

“19世紀までの古い段階においては、非生命現象と生命現象との間に暗黙のうちに一線が引かれていた。ところがその境界自身が非常にあやふやになって、生命現象にも物理学的アプローチで解析できる部分が、逆に非生命現象のなかに今までの決定論の通用しない部分ができたりしている”。

さらに、最近の日本のハイテク技術力に関連して、東大工学部の石井威望教授¹⁷⁾は日本人のデュアルな思考性を取り上げている。

“日本では精神的世界と物質的な世界とを明確に分ける考え方が一般化していない。日本人が和洋折衷的中途半端な生き方を選択しながらもおかしさを感じないのは、仏教伝来以来、東西の種々雑多な文化の良い点だけを選択

的に吸収する器用さを持っているからだ”。

“日本のハイテクがなぜここまで進んできたかを理解するうえでも、日本人のデュアル性は重要なポイントだ。何故ならハイテクノロジー（高度技術）は理想をとことん追及する一方で、テクノロジーを使いこなす現場の職人の気質やものの考え方で生きとし、死にもするという現実的、非理想主義的な面ももっている。それがひじょうに日本人にフィットしたゆえに発達があったのだ”。

“かつて「ソフトウェア＝内なる宇宙」は観念論として片づけられていた。ところが絶妙なコントロール、絶妙なアレンジ、絶妙なバランスという観念の世界にだけ存在したソフトがハードに取り込まれ始めると、今まで「世の中に存在しなかったもの」が登場してくる。たとえば、人工結晶もその一つである”。

Ⅱ－２ 哲学及び経済学における二元思考

二元思考については、かなり以前から私には、SZ システム思考¹⁸⁾というものがある。この発想は繊維の糸がZ（左撚り）とS撚り（右撚り）の糸で合糸され安定的な糸によっていることや、真言密教の曼荼羅^{まんだら}がZ系列に如来像をとり、S系列では菩薩像から成っていることからでたものである。

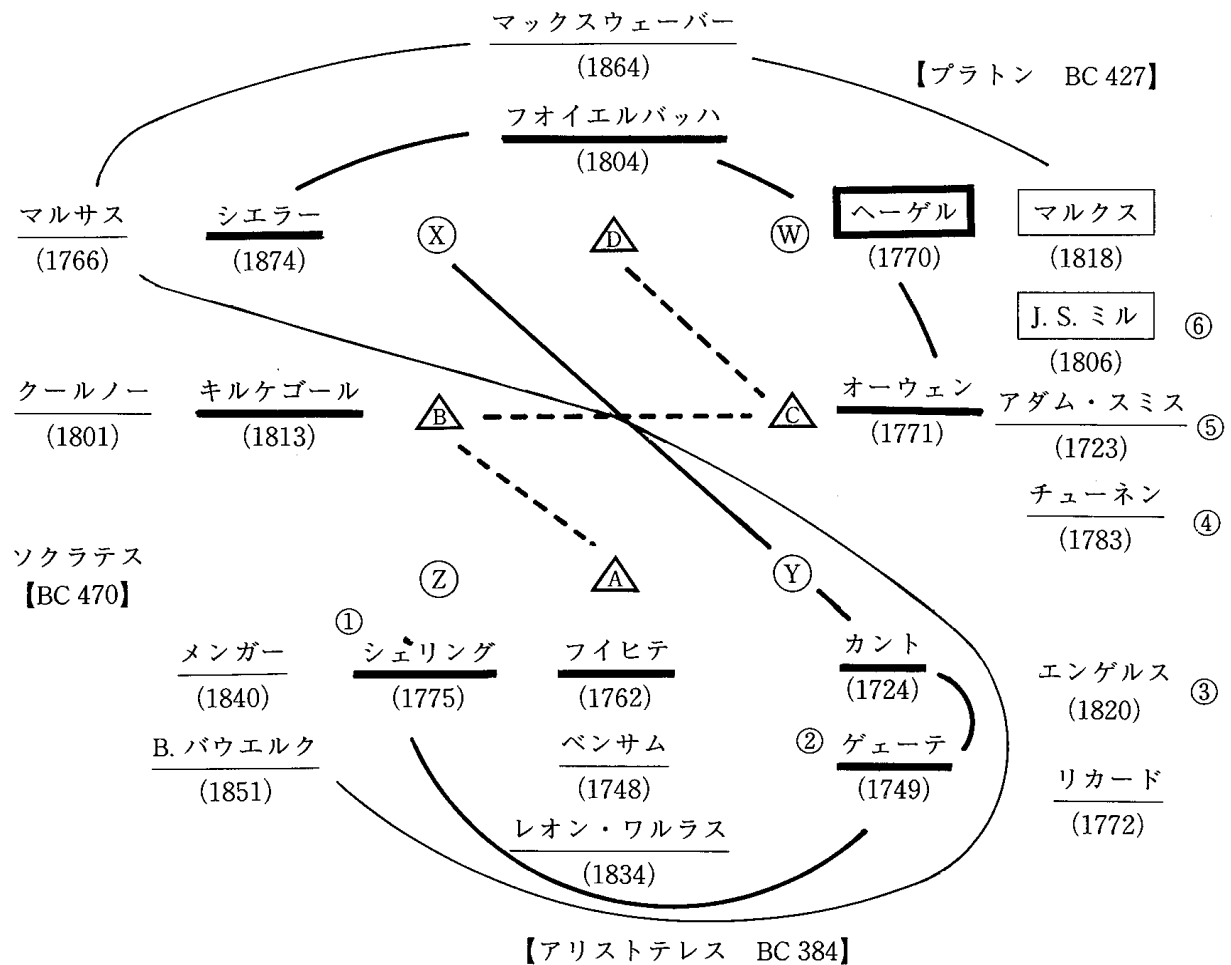
自然科学については専門的知識がないのでSZによる二元思考を考えてみることはできないが、若干専門的に考えてみたことのある、社会科学のうち哲学と経済学について、若干考察してみたい。

司馬遷の「史記」の中の後漢光武帝の君臣の交わりを評して「啐啄同機^{さいたくどうき}」という言葉がある。外から親鳥のつつく啐と、内側から雛鳥の叩く啄とが機を同じくして雛^{かえ}が孵る。一つの時代が勃興するときは、期せずして同士の気合が一つに集まる。国家の大業、偉大な事業、科学的創造すべてそうだというわけである。

ここで取り上げたカント、ヘーゲルをはじめとするドイツ観念論哲学や西欧資本主義経済学とマルクス経済学或いはセザンヌ、ルノワール、モネなど

社会科学における二元思考

ドイツ観念論哲学とマルクス経済学の二元思考



注) ドイツ観念論哲学

- ①・1795 ヘーゲルはシェリングの諸論文からしだいに影響をうけ始める
- ①・1800 ヘーゲルはシェリングへの手紙にイエナ大学で一緒に教授したいことを書き送る
- ①・1801 シェリングは同一哲学の立場からフィヒテを批判。ヘーゲルはシェリングと共同で哲学演習指導
- ②・1805 ヘーゲルはゲーテの推挙でイエナ大学員外教授に昇進 (37歳) “精神現象学” 最終稿を脱稿

マルクス経済学

- ③・「資本論」第一巻 (資本の生産過程) 第二巻 (資本の流通過程) のまえがきは (エンゲルス)
- ④・第二巻, 第19章, 第1節, 重農学派
- ⑤・第二巻, 第19章, 第3節, アダムスミス及びその以後の人々
- ⑥・第一巻, 第13章, 機械装置と大工業 (J. スチュアート・ミル, 287ページ)

(参考) 岩崎武雄篇『世界の名著－ヘーゲル』中央公論社, 昭和42年, 年譜
鈴木鴻一郎篇『世界の名著－マルクス・エンゲルス』中央公論社, 昭和48年

によるフランス印象派絵画もその類いに属するものと考えられる。

図の——線はドイツ観念論哲学を構成する哲学者、——線は当時の資本主義経済学を構成する経済学者をそれぞれ性格別に配置したものである。A, B, C, DとW X Y Zの性格は私が仮説的に設定した性格¹⁹⁾であり、前者はZ系列の学者、後者はS系列の学者という二元システムの学者の構成をとっている。この性格づけは溯ってギリシャ哲学〔ソクラテス、プラトン、アリストテレス〕についても当てはまるが、説明は省略する²⁰⁾和辻「人間の学としての倫理学」42ページを参照)。

ドイツ観念論哲学

この哲学の二元思考を要約すれば、Z系列が人間個人を重視するのに対しS系列は個人を超えた全体を優先する立場をとる。

“カントにおいては実践哲学が本来の哲学であり、そうしてこの哲学の根本問題はすべて「人の学」に属していた”²⁰⁾

“カントは、絶対者はわれわれの認識の対象にならないと考える。われわれの認識能力のうちには、はじめから一つの固定した論理（先天的な直観形式、先天的な悟性概念）があって、絶対者というものはわれわれの思惟には入らないというものであった。ところがヘーゲルの場合、こうした考え方は存在しない。ヘーゲルはむしろ絶対者をそのあるがままに、その真実態において認識することこそ、われわれの思惟の役目だと考える”²¹⁾

ヘーゲルの場合、自然科学でのデカルトが、神を第一原理としながらも分業原理によって神を扱わなかったのと違って、絶対者＝神を考えるのを思惟の役割とした。ヘーゲルは絶対者の構造について考える²²⁾

“絶対者を認識するためには、有限者の全体をとらねばならない。ここにわれわれは悟性的認識（カント的）から出発しながら、それを越えてさらに高次の認識へと進む。

絶対者のもつ客観的な構造を明らかにする方法は弁証法²³⁾による。弁証法的展開は一度限りのものでなく繰り返し行われねばならない”。

カントの倫理学は人間における主体の統一を取り扱う、いわゆる自覚の間

題であった。しかしヘーゲルにいわせると次のようになる。²⁴⁾

“カントは人間の全体性を把捉し得ず、本体人の個別性を暗々裏に認めることによってその個人的意識を露出していた。

フィヒテは自我に対して非我をたてた。非我を通じて自我の根源をさぐるのは正しいが、フィヒテの非我は「物」「客体」であって主体的な非我ではなかった。彼の「知識学」の場合はそれでよいが、主体の学である倫理学はそうであってはならない。主体的な非我は他者にほかならない。他者が自我の根源であり、従って自我が産出する。

シェリングの関心は自然であって人間ではない。しかし彼のいう生ける「自然」は実は自然ではなくして精神であることを、すなわち主体であることをヘーゲルはシェリングを通じて悟った。生ける全体性はヘーゲルのいう、まさに人倫的な実体であった”。

ヘーゲルの最初の著作である「精神現象学」²⁵⁾は“絶対者は差別的限定に自己を実現し顕示することにおいてまた自己を認識せしめるのである。しかもそれが絶対者であるが故に、その認識は絶対者の自己認識以外のものであることはできぬ。そこで認識の問題としての「精神」が「人倫を超えて優位を占める」という新しい立場を輝かしく結晶させたものであった。

ヘーゲル哲学はその同調者、批判者を含めて壮大な体系を作り上げた。図に示すS系列の⑥タイプの学者の統合的性格である。これは次に示す資本主義経済でのマルクス経済学にも通じる。

ヘーゲルはハイデルベルグ時代「エンチクロペディー」を完成する。この書はヘーゲル哲学の体系をなすものであり、第一部「論理学」、第二部「自然科学」、第三部「精神哲学」に分かれる。ベルリン時代の1821年に彼は、法の哲学（Grundlinien der Philosophie des Rechts）というヘーゲル最後の主著を完成した。

ヘーゲル哲学は多くの青年の心を惹きつけ、また同時代にヘーゲル学派が形成された。ヘーゲルの影響はドイツ国内のみならず、イギリス、フランス、デンマークなど諸外国に拡まった。

ヘーゲル左派

ヘーゲル左派に属するものは図のZ系列に属するものが多い。すでにヘーゲルの生前、ショーペンハウアーはヘーゲルの理性主義的哲学に反対して非合理主義的哲学を提唱した。非合理主義的勢力が増すにつれ、更に徹底した立場からヘーゲルの理性主義を激しく批判したのがデンマークの思想家で実存主義思想の祖であるキルケゴールであった。

キルケゴールの批判の要点は、和辻氏によれば次のようなものである。

“ヘーゲルの「理性の狡智」(Die List der Vernunft) という考え方からすれば、世界歴史のうちにおいて行為するわれわれ個々人はこの理性の法則によって操られる操り人形にすぎなくなる。われわれはいかに生きるべきかについて思惟し決断しなければならない。ヘーゲルの思惟は、思惟する者自身が歴史のうちに実存しているにもかかわらず、この事実を忘れてしまい、ただひたすらに歴史全体を客観的に考察しようとする。これは思惟者のいない思惟にすぎない”。

フォイエルバッハはキルケゴールの人間論をさらに押し進めた図に示すZ系列の最後の学者であったし、同時に彼のヘーゲル批判はマルクスの唯物史観—資本論につながったとされる注目的な論文である。²⁶⁾ この経緯を和辻氏は次のように解説する。²⁷⁾

“フォイエルバッハは言う。ヘーゲルは「有」を哲学の初めとしてそこから出発した。しかしそのような「有」は「有」の概念であり、現実的な具体的、感性的な「有」ではない。「有」は本来「思惟」に対立するものであって「思惟」における「有」ではない。神学においてすべての物が神の中にあつたように、ヘーゲルではすべてのものが思惟の中にある。フォイエルバッハは神学的ヘーゲル哲学の廃棄によって「神の学」より「人の学」へ転向する。

しかし「有」が思考から出るのではなく、思惟が有から出ることを宣した「哲学的革命テーゼ」も有が人であることを説きつつ最後はヘーゲルの絶対的倫理に到達するという撞着に陥いる。

フォイエルバッハの「人の学」は「有」を「思惟」より救い出すことにお

いてヘーゲルの呪縛を解きながら、しかも人間の本質に徹底できなかった。人間関係の実践的行為的内容を軽視するとき弱点をもったことを鋭く明瞭に指摘したのはマルクスであった。マルクスにおいて「人間存在」はさらに具体的に把捉せられ「人間の学」は一層鮮やかに形成され、マルクスの「唯物史観論」に転化される”。

フォイエルバッハの「人間」の本質は、後に述べるように図に示すフォイエルバッハに代ってマックス・ウェーバーの「人間類型論」にまたねばならなかった。

Ⅱ－２ 資本主義経済学における二元思考

経済学についても、哲学と同様に二元思考が認められる。S系列がマルクスの経済学に代表されるように、人間個々の人の行為を無力化する全体的圧力のシステムを問題としたのに対し、Z系列はマックス・ウェーバーにみられる個々人ないし人間類型にもとづく自由な行為の法則が問題となる。

“マルクス²⁸⁾の唯物史観の根本テーゼは”「人間の存在」を意識の根底におく考え方である。「人の意識が人の有 (sein) を確立するのではなく、反対に人の社会的にあること (gesellschaftliches sein des Sein der Menschen) が彼らの意識を決定する」。この人間の存在はマルクスにとっては「人の生活の社会的生産」であり、人の物質的生産力の「一定の発展段階に相応する生産関係」である。マルクスの仕事は、「人間存在」において特に「社会の契機」をのみ捕え、その解剖学を経済学として遂行することにあつた”。

また、マルクスは「資本論」第一巻、第13章「機械装置と大工業」で、ジョン・スチュアート・ミルの「経済理論」を批判する。

“ミルは「これまでなされたあらゆる機械の発明が人間の日々の苦労を軽減したかどうかは疑わしい」という。

けれども、そういうことは、資本主義的に使用される機械装置の目的では決してないわけだ。機械装置は、剰余価値の生産のための手段なのだ。……

機械は労働者を労働から解放するのではなく、彼の労働を内容から解放す

ることにより労働の軽減でさえも責苦の手段となる。資本主義的生産がたんに労働過程であるだけでなく、同時に資本の価値増殖過程でもある限り、労働者が労働条件を使うのではなく、逆に労働条件が労働者を使うのだということとは、どんな資本主義的生産にも共通である。しかしこの逆転は機械装置が用いられるとともににはじめて技術的かつ明瞭に現実的なものとなる。労働手段は自動装置に転化されることによって、労働過程そのもののなかで、労働者に対し、資本として、生きた労働力を支配しつくす死んだ労働として、相対する。手の労働から分離して労働に対する資本の権力に転化される”。

マルクスは、さらに「資本論」第二巻、第19章において、重農学派、アダム・スミスとスミス以後の人々も批判している。

スミスにとって人間の「労働」は富をつくり出す根源である。スミスの「国富論」をささえる思想は主としてその第二篇の蓄積論を中心とする国富の理解であり、この点では重農学派（図に示す△チューネン）の影響をうける。図⑤のエンゲルスについては、彼が「資本論」の理解者であり、マルクスの良き協力者であったことは周知の通りである。⑧のマルサスはその「人口論」²⁹⁾において、アダム・スミスと異なり「諸国民の富の増大が貧しい労働者の状況を改善しえない」ことを説明する。人口と食糧とが増加する比率の違いの結果として、社会の下層階級につくり出される動揺に対する救貧対策を強調し、思想的にマルクス左派を形成することとなる。

このようにして、アダム・スミスの労働価値説はリカード⑤によって引きつがれマルクスによって完成することになる。

また同時に、スミスの労働価値説は同じくりカードによって引きつがれながらジョンスチュアート・ミルの「理論経済学」(Principles of Political Economy)としても完成する。

ミル³⁰⁾の経済理論は、彼が幼少からなじんできたリカード経済学（経済および課税の原理—1818）とほとんど変らない。違いは富の生産に関する法則とその分配の法則を論じているところである。

“生産の法則は物理的真理の性格を有し、なんら恣意的なものはない。資

本蓄積の程度、人間の精力、機械の精巧さ、分業の効果によって生産がきまる。これに反して、分配の法則はそれと異なる。これはまったく社会制度の問題である。分配法則は社会の指導的階級の意見と感情とによってつくられる”。

ミルはリカードのように全く自由放任論者ではなかった。ミルはリカードに影響されながらも、自然の法則一本やりに徹底できず、さりとて人為的統制を加えることで公私の利益を一致させるというベンサムのを考え方を全面的に採用することもできないという折衷論的立場であった。後の福祉国家論的立場のはしりである。

しかし、彼の「経済学原理」は初版以来7版を重ね長いあいだイギリスの大学の経済学の教科書として読まれた。広く労働者の間にも普及した。マルクスの「資本論」がドイツの労働運動のあいだで果したと同じような役割をイギリスで果した。

図の㊸に示すマルクスとJ. S. ミル二人がS系列経済理論の統合者だったのに対し、Z系列の統合は㊹のマックス・ウェーバーにあったとみるべきであろう。

Z系列の学者は経済理論の図式的統合をはかるより、あくまで人間行為を具体的に考えていくという特徴がある。

“ベンサム³¹⁾の「自然は人類を快楽と苦痛という、二人の主権者の支配のもとにおいた」ではじまる「功利性の原理」は「最大多数の最大幸福」というものであるが、これについてはいろいろな批判がある。しかし彼の目的は「快楽とか幸福」を具体的に考えていこうとするものであった。道徳を自然科学と同じような客観的法則のうえに樹立することが目的であった。ベンサムにとっては、快楽あるいは苦痛を数量化しようとしたことである。これは奇しくも、図㊹のクールノー、図㊹のレオン・ワルラスのZ系列を通じてやがて、ローザンヌ学派から今日の数理経済学派の抽象へと発展していく。

ベンサムの経済学についていえば、アダムスミスに心酔していたし、自身はもっぱら技術に関心を集中していた。「富の部分によってつくり出される

幸福の量は、その部分を増すごとに減少していく」と図②のメンガー・バウムバウエルクの限界効用の理論の先駆をみせている。

アダム・スミスについていえば、すでに述べたように、「経済人」を仮定し、人間の心理的行動の分析に立って、その社会的行動や考え方の準則ないしパターンを検出しようとするものであった。

マックス・ウェーバーの理論はこうした線に沿って、一応、最終的にまとめられたものである。それはすでに述べた彼のエートス理論に基礎をおく「人間類型論」であり、その重要な成果の一つが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と考えてよい。

Ⅱ－３ 社会科学的方法論における二元論

科学的、普遍化的というのは、現実をあるがままに模写し記述するのではなく、現実の過程のなかで反復的にあらわれ、また地域差や状況のいかんにかかわらず普遍的にあらわれる事象や行為の経過を探究しこれを論理的に確定することである。こうした方針は「法則定立的」とよばれる。これに対し一回生起的な事象や行為に着目し、これをその個別的人格に即して把握する方針は「個性記述的」と呼ばれる。前者は自然科学が、後者は歴史学がその代表的なものである。

マルクス³²⁾の場合の科学的というのは、自然科学的方法論に立つ。自然成長的分業によって惹き起こされる人間の疎外現象、それを原因として人間の営みが物化され、社会現象が自然現象と同じように科学的認識の対象となり得るとみ、自然科学の場合と同じような理論的方法を適用しようとした。しかし社会科学は、自然科学におけるように、時空の限定を脱した普遍妥当的法則、例えば万有引力の法則を定立することは不可能である。対象が自然ではなく、意識をもち行動する、生きた人間諸個人だから、その因果関係を確実に追いかけるためには、自然科学にはみられない独自の方法を必要とする。

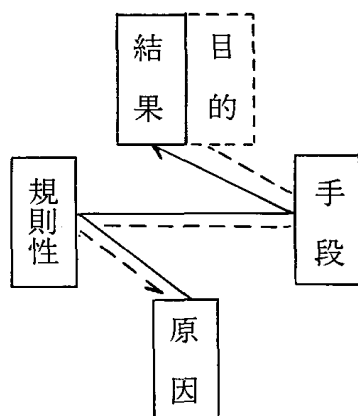
マックスウェーバーの場合も、社会学は普遍的な文科科学であり、また法則定立的な歴史科学であるとした。しかし、ウェーバーの目指すものは、時

代的，地域的にある程度まで限定されながら，しかも一回生起的でなくて反復的であり，具体的なケースを通じて共通的にみられる類型的な現象，あるいはそれを概念的に確定することによって得られる類型的な法則であった。このような類型的な法則の一つとして重要視したのが「理想型」³³⁾である。“ある社会的行為が「意味適合的」に行われ，かつこの行為の経過が統計的規則性をもって繰り返し行われる可能性があるとき，その社会的行為は「類型的行為」といわれる”。大切なことは，ウェーバーの社会的行為は，個人の社会的行為に「還元」してとらえられると考えたことである。

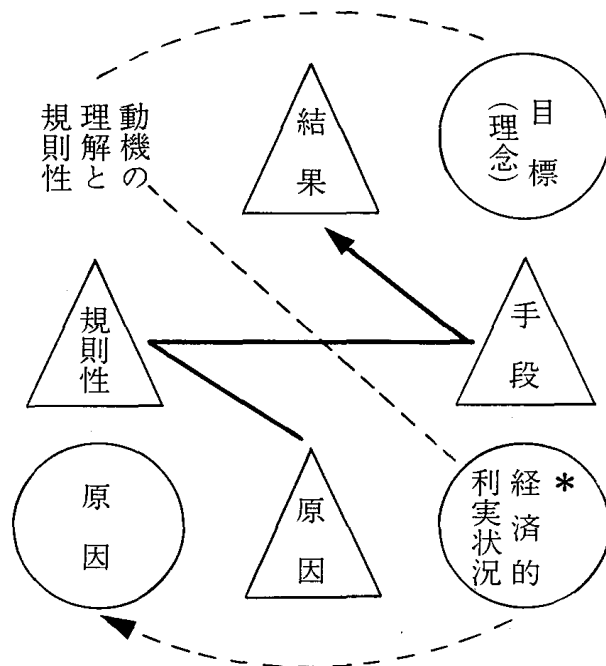
“個々の人間を超える行為や思考の主体としての集団や団体の存在を彼は否定する。元来は人間の行為によってつくられ—しかも個々人の外側にあって彼らの行動に影響を与え，これを拘束する力をもつもろもろの文化的構造物—法秩序，行政組織，宗教倫理，教育制度，国家や会社のような団体—な

因果律 (Kausalitat) と理解的方法 (Verstehende Methode)

テレオロギーの
因果論への組み替え



因果律と理解的方法の二元論



注) *政治的利害状況，内的，心理的に制約された利害を含む

ども個人の行為に還元し、あるいは分解することが可能であり、また社会学にとっては、この行為への還元が研究の前提をなすものとする。

彼の「理解的方法論」³⁴⁾ (Verstehende Methode) はこのための方法論なのである。

“ウェーバーの社会学の場合、その対象は終始生きた、自由な意思をもって行動する人間である。さまざまな目的を設定し、その手段を選択して、決断をしつつ行動する。社会現象のなかには、人間行動における目的・手段の関連、いわゆるテレオロジーが奥深く含まれている。

社会科学も自然科学のいう因果性の範疇を使用して、十全な意味で科学的認識を成立させることができる。その解釈のし方を、私は「目的論的関連の因果関連への組みかえ」とよんでいるのですが、ある目的を設定し、そのための手段を選び、そして決断しつつ行動することによって一定の結果をもたらすということは、われわれの主観においては、たしかに目的—手段の関連として意識されています。しかし、それを客観的な過程においてみますと、原因—結果の関連ともなっている。そうした目的—手段の関連を原因—結果の関連に組み替えていくことはどういう手続きによって可能になるのでしょうか、これが有名なウェーバーの「理解的方法」なのです。ウェーバーの表現を借りると「社会学とは、社会的行為の主観的に思われた意味 (subjektiv gemeinter sinn) を解明しつつ理解し、それによってその経過と影響を因果的に説明しようとする学問」だということになる。つまり社会科学的な認識の場合は、自然科学にはみられない、動機の意味理解ということが加わってくることになる”。

この動機の意味理解とともに彼は「利害状況」(Interessenlage) という概念を考える。マルクスの「資本論」のなかで、ものとしての商品の分析から始まって、一步一步、経済現象というものが、ほんとうは、人間と人間の関係に他ならないということ、最後に、階級という人間のもっとも現実的なあり方が明らかにされる。大塚氏はウェーバーの考え方を次のように説明する。

“マルクスの世界においても、経済から外へ踏みでた他の文化領域では、

人間と人間の関係が現われてきて、そのばあい物と物との関係を追求していく経済学の方法をただ延長するだけでは現象を把握しきれない。経済以外の他の文化領域における社会現象の「固有法則性」³⁵⁾ (Eigengesetzlichkeit) を積極的に明らかにしていく道が失われてしまう。「利害状況」は政治的、経済的さらに内的・心理的な状況を含む。「人間類型」の理論ではこうした偶然的、非論理なものを本質的に含み、理念 (Idee) と利害状況の相関と緊張の関係としてみていく。その範例として彼の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という論文を書いた”。

また尾高氏³⁶⁾は言う「研究者はウェーバーのいう「理想型」のモデルを尺度として用いることによって、将来おこり得べき社会的行為の変容や変質をある程度まで予測することができる。また、この理想型によって本来そこにあるはずであって、しかも研究者の手許には欠けているデータがどこにあるかを発見することができる。ウェーバーはこうした効果を「発見的」としている”。

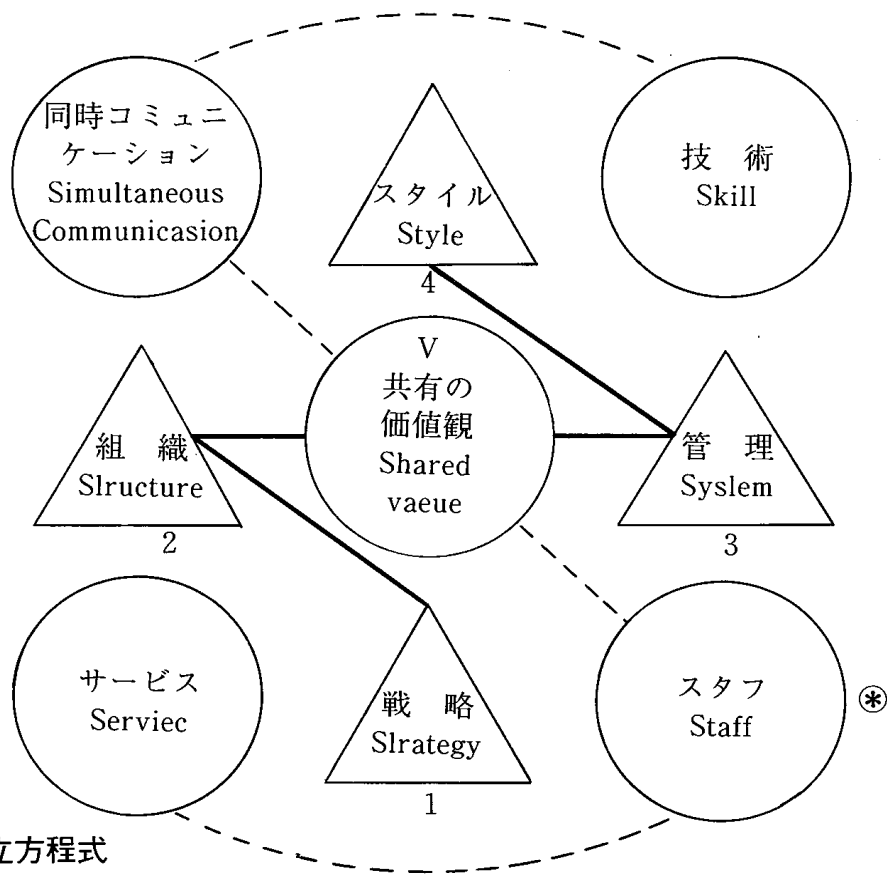
Ⅲ 経営学とマーケティングの二元思考

Ⅲ－１ 経営学における二元思考

激動する環境に適応しながら、企業を存続、成長させていくための経営システムは、①トップの担当する戦略的経営過程、②ミドルの担当する管理的経営過程、③ローワーの担当する業務的経営過程に階層的に三分される。各層はそれぞれ固有の計画、組織、管理（コントロール・システム）をもつとともに、下層のそれらは、上層のものによって制約される。しかも最上層の戦略・計画とコントロールが全経営の中心となる。意思決定の本質は不確実性であり、経営陣は判断力に対して報酬が支払われる。

戦略計画は経営理念、経営目標、経営環境の関連の中からの経営戦略（具体的には製品市場戦略、多角化戦略など）を策定する。これが出発点となり「組織は戦略に従う」との命題によって管理的経営過程、業務的経営過程が

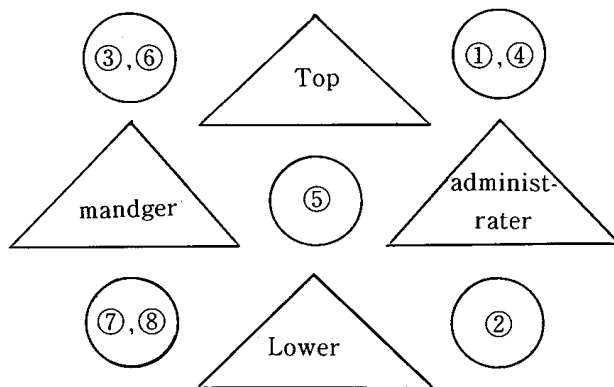
経営学における二元思考



上図の連立方程式

$$\begin{aligned} \text{戦略} &= f_1 (V, 2, 3, 4, \text{skill}) \\ \text{組織} &= f_2 (V, 1, 3, 4, \text{staff}) \\ \text{管理} &= f_3 (V, 1, 2, 4, \text{si, commn}) \\ \text{スタイル} &= f_4 (V, 1, 2, 3, \text{service}) \end{aligned}$$

*(例) スタッフのサブシステム



$$\begin{aligned} \text{lower} &= f_1 (V, (2)) \\ \text{manager} &= f_2 (V, (1, 4)) \\ \text{administrator} &= f_3 (V, (7, 8)) \\ \text{top} &= f_4 (V, (3, 6)) \end{aligned}$$

(超優良企業の八つの基本的特質)

- ①行動の重視 a bias for action
- ②顧客に密着 closs to the customer
- ③自主性と企業家精神
autonomy and entrepreneurship
- ④ひとを通じての生産性
productivity through people
- ⑤価値観に基づく実践
Hands-on value driven
- ⑥基軸から離れない
stick to the knitting
- ⑦単純な組織 lean staff
- ⑧厳しさと緩やかさ
loose-tight properties

実施される。この経営過程が厳格なピラミッド型の内容をとるか、緩やかな内容をとるかによって経営スタイルが分かれる。

これを図示してみよう。

図のZをつなぐ線上の経営過程を研究する経営管理は工学や医学と同じ意味において、役に立つ知識であるという意味の一元思考を疑うものはなかった。しかし、図ではS線上の経営過程の研究を含めて二元思考ということになる。

最近の二元思考のはしりは米国経営学から発した「日本的経営論」³⁷⁾に始まる。かつて経営学では日本的制度や慣行は極端にいえば、それらがただアメリカ的でないというだけで、改革され、克服されるべきものであった。この「日本的経営論」はアメリカでベストセラーになったピーターズ&ウォーターマンの「エクセレントカンパニー超優良企業の条件」³⁸⁾によって再評価されることとなった。

“戦略と組織の旧来の考え方にプラスすべき具体的アイデアの欠如は誰の目にも痛いくらい明らかだった。1980年、不況の中でにっちもさっちもいなくなったアメリカの経営者たちがこぞって、太平洋の広大なひろがり以上に大きな歴史や文化の差を無視して日本的経営法にとびついた年である”。

図では企業史家アルフレッドチャンドラーの命題通り「組織は戦略に従う」という順序になっていたが、ピーター、ウォーターマンによれば⁴⁰⁾ “戦略と組織の問題は、やろうと思えば思えばほど、組織の諸問題—機構や人間などといった—にまでさかのぼらなければならないのだ。そうなると経営効率の研究は結局のところどうどうめぐりとなる恐れがある”。

これは、図の連立方程式が示したように、戦略と組織という要素にマルティコ（多重共線型）⁴¹⁾の関係があることを意味し、戦略、組織の問題はS系列の変数である技術とか人間という二元思考にならざるを得ないことを示すものである。

さらに、この二元思考を進めるに際しては、例えば、図のスタッフのサブ・システムにおいても同様の二元思考を採らねばならないことを示しておい

た、このS系列については、さきのロワー、ミドル、トップ三階層の業務過程について述べておいた。一橋大学の野中教授⁴²⁾は、“新たな組織を求めて—組織のあらゆるレベルが参画して戦略をつくりだす戦略の創造が必要になってきた。「はじめに組織ありき」が真になってきた”と述べている。こうしたとき意思決定者はただ単に組織図の四角い枠を並べかえる（エクセレントカンパニー rearranging the boxes on the chart）だけに終ってはならないことを意味する。つまり、図に示された形のS系列の二元思考を行うことが必要になる。この二元思考のS系列についてはいろいろなことが考えられる。一つの例として図に示しておいたのは、ピーター&ウォーターマンが提示した革新的な超優良企業を特徴づける八つの基本的特質⁴³⁾（the eight attributes）である。

三階層を通じて共通するものは、企業が共通する価値観であろう。さらにそれぞれの階層に必要な要素思考がある。こうした二元思考が行われるとき、戦略と組織の問題も解決され、野中氏のいう創造的戦略が生まれることになる。

Ⅲ－２ マーケティングにおける二元思考

1) マーケティングのトータル・システム

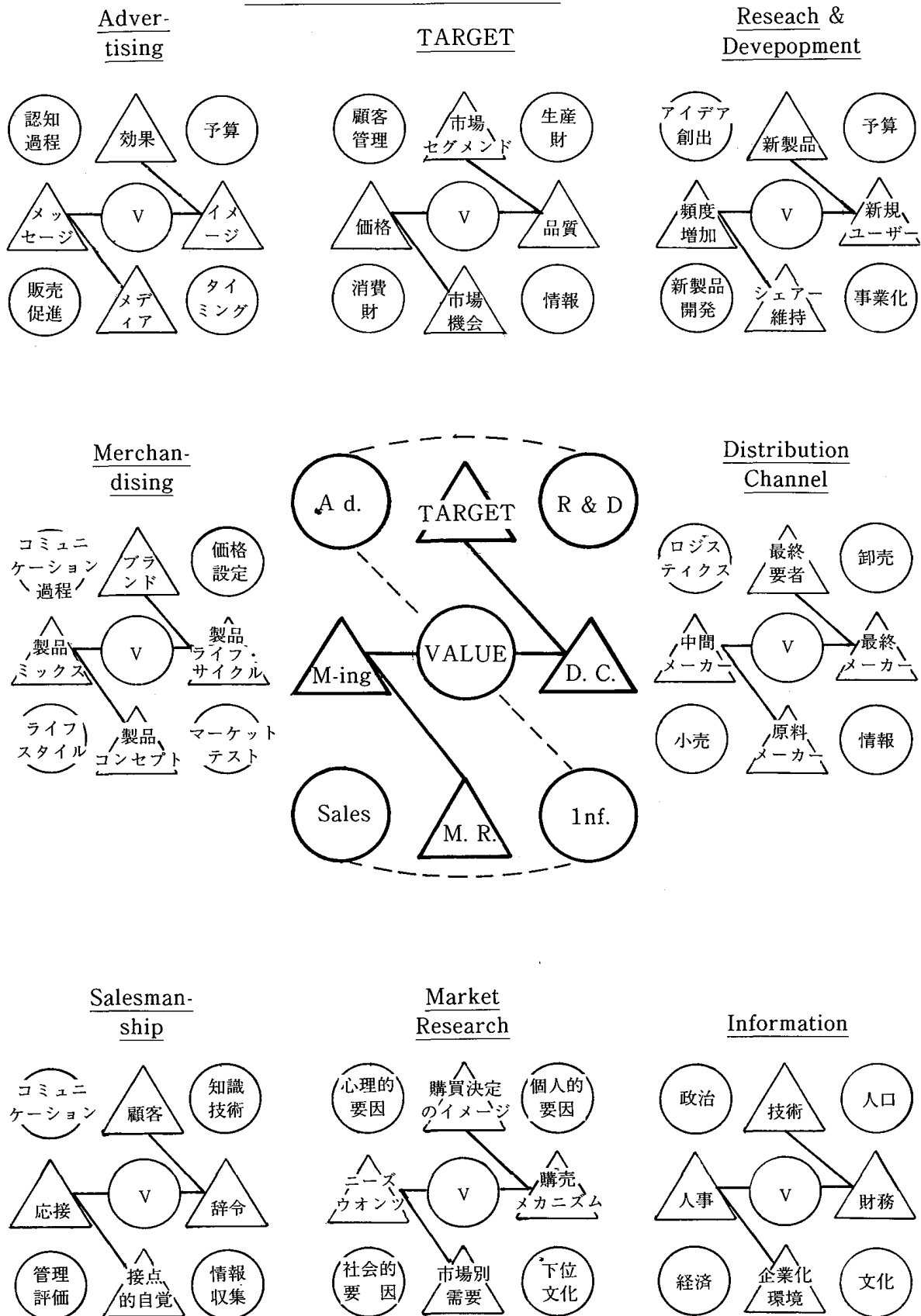
産業の独占的競争が普遍化するにつれて、産業マーケティングのSZ二元システム⁴⁴⁾が崩れ、新しく企業のマーケティングの二元システムが登場する。ドラッカー⁴⁵⁾は“産業が成長し、遅くともその規模が2倍になる頃までには、それまでの市場のとらえ方や市場への対応のし方では、不適切になってくる”として、これを構造変化により説明する。

二元システムの変化は技術変化についても生ずる。石井氏⁴⁶⁾は次のように説明する。

“一般に完結していた一つの体系が拡大する時には「逆説的な構造」つまりAがあれば必ず非Aがあるという構造がみえてくる。例えば従来の機械（ハードウェア）は機械の構造体そのものを意味していた。コンピューター

社会科学における二元思考

マーケティング・システムの二元思考



が登場する前まではハードウェア、ソフトウェアという区別はとくになかった。ところがコンピューターが登場するようになってからは、機械のなかでも知的な部分をソフトウェア、それ以外の部分をハードウェアと分離して呼ぶようになった”。

図は中央のメインシステム（M・S）とその変数を説明する8つのサブシステムによって構成され、それぞれがSZの二元システムで成立することを示している。

M・SにおけるZ系列は市場調査（Market research）、商品企画（Merchandising）、流通経路（Distribution channel）、マーケティング対象（Target—ユーザーないし消費者）といういわゆるマーケティングの順序をふむ変数である。これに対し、S系列は新製品開発（Research and Development）、広告（advertising）、販売員（Salesman）という大なり小なりコミュニケーションの問題を内包する変数といってよい。つまり戦略、組織、管理的な業務内容とコミュニケーション的業務内容の二元性である。一般に前者は後者の業務が特別に含まれていなくても成立する。しかし前者の業務が完成度に達するほど後者の業務はみえてくるようになるし、また後者の業務のなかに内包されるようになる。

コミュニケーション過程については、技術者の手によって図式化されているし、社会科学の領域の中でもコミュニケーション理論として一応、もうけられている。例えば、政治心理学者のH. D. ラスウェル⁴⁷⁾はマス・コミュニケーションの基礎的な課題は“誰が、何を、どんな通路で、誰に、どのような効果で伝えるのか”（Who says, What, in which channel, to whom, with what effect?）をさぐることにある。ラスウェルのこの設問がコミュニケーションに関する社会科学を五つに分ける仕方、すなわち「送り手分析」、「内容分析」、「通路分析」、「受け手分析」、「効果分析」をうみ出すようになった。

しかし、図式は同じでも、工学者のばあいは“情報”の伝達それ自体であって、“情報の意味”には関心がない。加藤氏⁴⁸⁾は云う。

“「意味」を捨象したコミュニケーション理論は社会学的には無意味である。

その「意味」が人間行動の中でどのような役割をはたすか、これこそが人間の社会的コミュニケーションの最大の課題なのだ”。

2) コミュニケーション・システムへのアプローチ

マーケティング・システムは図にみるように中央のメインシステムとしてのSZ各要素が、さらにサブシステムのSZ要素として展開する。各システムの合理性だけについて論ずることはあまり意味がない。マーケティングの研究について、もし意味のある研究があるとするれば、それは、コミュニケーションと経営効率との研究を通じ、その理論化への途を開くことであろう。

しかし残念ながら、この種類の研究はほとんどみたことがない。ただ問題になりそうな問題の指摘は時おりみかけるが、経営効率の関係で、たとえば、“事後的解释”(Retrospective sense making)として十分なものとはいえないまでも、何らかの試みというものもみられない。まして理論としての体系化は目下のところ遠い日程といわざるを得ない。

以下、私がいう、先覚者の問題点の指摘の例についてその若干を紹介してみよう。問題はこうしたことをどう組み立て、どう実用化するかである。

①サブシステム Advertising—認知過程について⁴⁹⁾

キャントリルはその著書 The “Why” of Man’s Experience, 1950 (邦訳「人間経験の謎」創元社)で人間の知覚の本質について、重要な疑問を提出した。ひとことでいえば、キャントリルは、事物の“意味”は、事物がどのようなものであるかということからは導き出されず、事物がどうみえるか、という主体的な反応のなかにある、ということを強調する。

②サブシステム Salesman—コミュニケーションについて⁵⁰⁾

“意味”の問題に関しては発信者の意味 A と受信者の意味 A' とは決して同一のものではあり得ない。A と A' というふたつの意味のかさなり合った部分をわれわれは「コミュニケーション」と名づけ、また実用上はこの共通の意味部分にたよることで社会生活が成り立っているのだが、A と A' とが完全に重なり合うことはない。A と A' とは共通部分をもつと同時に、全く重なり合わない部分を少しづつもつ。われわれはこの部分を「ディスコミュニケーション」(discommunication)と名づける。

③サブシステム M. Rーニーズ・ウォンツ⁵¹⁾

Our plan is to lead the public with new products rather than ask them what kind of product they want. The public does not know what is possible, but we do. So instead of doing a lot of market research, we refine our thinking on a product and its use and try to create a market for it by educating and communicating with the public.

④サブシステム R&Dーアイデア創出について⁵²⁾

- 「アイデア」にもとづくイノベーションに成功した人物をとり上げて、いかなる個性、行動様式、性癖が成功をもたらしたかを明かにしようという試みも、うまくいっていない。(224ページ)
- ヘンリー・フォードも本田の場合と同じように、自分には技術と創造が適していることを知っており、自分の仕事をこの分野に限定しようとしたのである。フォードがみつけた男ジェイムズ・カズンズはフォードに劣らず会社の成功に力があつた。フォード自動車は、カズンズの辞任までは成長を続け繁栄した。カズンズの辞任後数カ月にして、ヘンリーフォードは、かつて自分が何に適しているか承知していたことを忘れてトップ経営陣の機能をことごとく自分の掌中においた。そして、その後ヘンリー・フォード自動車は長い転落の時代に入ったのである。(347ページ)
- 1950年代の末、ニューヨークで数人の若者が出会った。彼らは金融の世界に生き、主としてウォールストリートの証券会社で働いていた。彼らは20年前の大恐慌以来不変の証券業界がいまや急激な変化の時代に突入しようとしていることで考えが一致した。彼らは金融業界について体系的に調べ、資金もコネもない新人に何ができるかを探した。その結果1955年に誕生したのがドナルドソン・フランキー & ジェンレッドであった。そしてその5年後には、この会社は、ウォールストリートにおいて主要な地位を占めるまでに成長した。(134ページ)
- 二人の若い技術者が、かの有名なガレージの中で、資金援助も事業経験もないままに、アップル・コンピューターを始めたとき、彼らは初めから、一つの産業をつくり、これを支配することを目ざした。(358ページ)
- 今世紀初頭、ミネソタの片田舎で、2人の外科医が総合病院施設の建設を決意した。医療についてまったく新しい考え方をもとにし、著名な専門医たちがチームをつ

くって治療にあたるというものであった。初めから、医療の世界において群を抜くことを目指し、著名な専門医や才能に恵まれた医師たちを集めることを狙っていた。そのうえ、当時としては法外な医療費を払える患者を集めることを狙いとしたのである。(359ページ)

- イノベーションに成功するのは、現場近くにいる人たちである。アップル・コンピュータを発展させたのは、香水商やファッションのバイヤーではなく、コンピュータの専門家であった。(176ページ)

⑤サブシステム Merchandising—コミュニケーション過程⁵³⁾

いつの時代にも、出来の悪い生徒でさえ、かなりできるようにしてしまう天才的な数学教師というものがいる。そのくせ、この天才教師を真似することの出来る者は一人もいない。数学を教えるうえで必要とされるものは天賦の才能なのだろうか。方法論なのだろうか。あるいはまた心理的、感情的な問題なのだろうか。誰も知らない。そして、まさに問題が理解されていないために、問題解決の処方箋を見つけられない。(127ページ)

⑥サブシステム R&D—事業化⁵⁴⁾

トップ経営陣を構築することは、ベンチャービジネスにおける企業家的経営のための最も重要な一歩である。正式の取締役会が必要ではないかもしれない。いずれにせよほとんどの取締役会は助言を与えたりしない場合が多い。しかし創業者には基本的決定について話し合ったり、耳を傾けたりすることのできる相談相手が必要である。このような人間は、企業内ではまず見つけ出すことができない。ベンチャービジネスが必要としているものや、創業者の自信を問題にできる人物が必要である。(348ページ)

⑦サブシステム Information—人口⁵⁵⁾

人口構成の変化の分析は、数字から始まる。しかし人口の総数にはそれほど大きな意味はない。たとえば年齢構成のほうかはるかに重要である。1960年代でいうならば若年層の急増であった。1980年代でいうならば、注目すべきは若年層の急減である。そして40歳以下の中年層の着実な増加であり、70歳以上の高齢者の急増である。これら1980年代の特徴は1990年代において、さらに顕著なものとなるはずである。これら

の変化は、企業化にとっていかなる機会を提供してくれるものであろうか。(160ページ)

⑧サブシステム Merehandisingーライフスタイル⁵⁶⁾

われわれはライフスタイルとは何かということさえ知りえていない。ライフスタイルに関してこれまでなされてきた説明は、いずれも無意味である。(82ページ)

⑨サブシステム Advertisingーメッセージ、イメージ⁵⁷⁾

メッセージは情報である。メッセージはイメージをつくりだすための変化を意味している。メッセージがイメージを構成する際には、つぎの三つの事がらのうちどれかがおこる。まず最初は、イメージが変らないで、もとのままだということである。イメージを分子のような間隙がある構造をもつものと考ええると、メッセージはイメージにぶつからずにスカンスカンに抜けてしまう。大方のメッセージはこの程度のものである。(中略) だが革命的といってよいイメージの変化の第三の型がある。イメージの中核にメッセージがぶつかり、全体がすっかり変ってしまうことである。

⑩メイン・サブシステムーValue (価値観)⁵⁸⁾

- 価値のイメージは効果という点でたいへん重要であるが、その起源はきわめて曖昧である。受容したメッセージはイメージを自由にするわけではない。イメージの門口には、支払いを要求している価値体系が頑張っている。このことは記号的メッセージにも感覚的メッセージにもひとしくあてはまる。(61ページ)
- 談話は話し相手と同じように受け手につたわらなければならない。受け手につたわったかどうか調べるには、受け手の価値体系に依存していることを忘れず考慮しなければならない。(17ページ)
- 組織の行動は、重役のイメージの結果であるとも解釈される。重役は自分の価値体系をもち、それに従って決裁している。イメージは個人の特質であって、組織の特質ではない。(33ページ)

⑪サブシステム M. R.ー社会的要因⁵⁹⁾

情報化社会の諸問題

- 仕事対レジャーの二分法があいまい化してゆく(例：自動車に乗ること)物質に情報性が賦与されたのと同じように、仕事に情報性がかさなり合う。D. Bell のいう

game between persons の世界。

- 高度化した情報社会のなかで真にそれぞれ個人の自我実現に役立つ情報をいかに選びとるか。われわれは物質に代って情報というあらたな挑戦を受け始めている（リースマン）
- 情報化社会とはコンピューターによる情報処理の問題ではない。たしかにコンピューターは情報時代への道をひらくブルドーザーのようなものである。しかし、人間にとっての問題は、かぎりある人生のなかで、いかにして、そして、どのような情報の複合をそれぞれの個人のなかにつくりあげていくかという問題なのである。（220ページ）

注

- 1) Descartes, Discours de la Methode, 1637
- 2) 野田又夫編『世界の名著—デカルト』中央公論社, 昭和42, 「方法序説」, 169ページ
- 3) “Descartes, Meditationes de prima philosophia”
- 4) 前掲, 野田又夫編『世界の名著—デカルト』, 「省察」六, 298ページ
- 5) Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776
大河内一男編『世界の名著—アダム・スミス』中央公論社, 昭和43
- 6) Adam Smith, The Theory of Moral Sentiments, 1759
- 7) Karl Marx, Das Kapital, Kritik der politishen Oekonomie, 1867
- 8) 鈴木鴻一郎編『世界の名著—マルクス・エンゲルス I』中央公論社, 昭和48, 133ページ
- 9) 大塚久雄『社会科学における人間』岩波新書, 1977~84, 11ページ
- 10) 大塚, 同上, 113ページ
- 11) Max Weber, Gessamelte Aufsätze zur Religionssoziologie, 1920
「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のほか「世界宗教の経済倫理」, と題する三つの大論文「儒教と道教」, 「ヒンドゥー教と仏教」および「古代ユダヤ教」を収録している。
- 12) Max Weber, Die protestantische Ethik und Kapitalismus, 1905
- 13) 前掲, 大塚久雄『社会科学における人間』, 205ページ
- 14) H. Rickert, Gegenstand der Erkenntnis, 1892
Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 1896
- 15) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, 1781
- 16) W. Winderband, Geshichte und Naturwissenschaft, 1894 (Praludien に所収)
- 17) 湯川秀樹, 井上健編『『世界の名著—現代の科学 II』中央公論社, 昭和45, 付録

- 17) 石井威望『ニューハード文明論』PHP 研究所, 1989, 7
 - 18) 大嶋隆雄『マーケティングにおける複眼的アプローチ』横浜経営研究, 第V巻, 第4号, 1985
 - 19) 大嶋隆雄『生まれ年で人とのつき合い方がわかる本』JICC 出版局, 1987, 6
 - 20) 和辻哲郎『全集第九巻—人間の学としての倫理学』岩波書店, 昭和37. 7, 61ページ
 - 21) 岩崎武男編『『世界の名著—ヘーゲル』中央公論社, 昭和42, 41ページ
 - 22) 岩崎, 同上, 41~42ページ
 - 23) 岩崎, 同上, 42ページ
- 弁証法的展開
- 第一・有限なる事物を絶対的なものとして固定する
 - 第二・有限なる事物は変化していくから, われわれの認識は矛盾にぶつかる
 - 第三・矛盾するとみるのは有限的事物のみをみようとするからで, 全体をみるならばこの二つの規定は矛盾するものではなく, 契機として認めねばならない
- 24) 前掲, 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』, 61, 66, 75, 98ページ
 - 25) G. W. Friedlich Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, 1807
 - 26) Ludwig Feuerbach, *Zur Kritik der Hegelischen Philosophie*, 1846
 - 27) 前掲, 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』110~119ページ
 - 28) 前掲, 鈴木鴻一郎編『マルクス・エンゲルス』287, 302ページ
 - 29) 水田洋編『『世界の名著—バーク・マルサス』中央公論社, 昭和44, 523ページ
 - ・穀物條令について, リカードは産業資本の立場から穀物の低価格—労働者の低生活費—労働者の低賃金—高利潤という論理で穀物條令撤廃による穀物価格の引き下げを主張した。リカードが資本主義社会の自律的發展を考えていたのに対し, マルサスは地主の不生産的消費なくしては資本主義の社会は存在しえないと考えた。32ページ
 - ・無二の親友マルサスとリカードの往復書簡はマルクス—エンゲルスの往復書簡におとらぬ重要性をもっている。33ページ
 - 30) 関嘉彦編『『世界の名著—ベンサム, J. S. ミル』中央公論社, 昭和42, 57ページ
 - 31) 関嘉彦, 同上, 27ページ
 - 32) 大塚久雄『社会科学の方法』岩波書店, 1966~84, 51ページ
 - 33) 尾高邦雄編『『世界の名著—ウェーバー』中央公論社, 昭和50, 74ページ
 - 34) 前掲, 大塚『社会科学の方法』59~60ページ
 - 35) 同上, 大塚, 69ページ

マルクスも「資本論」のなかでウェーバーが「理解的方法」によって社会現象の因果関連を追求していくのとよく似た方法手続きをとっている。

第一部第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」という箇所をさしはさんで, その前には価値形態論が, その後には交換過程論がおかれている。

商品の価値が現象する等価形態の展開のあとを, その論理的必然性を追いかけてながら一般的等価論まで行きつくのですが, その一般的等価論という価値形態がこんどは現実に金という特定の使用価値に集中的に関係せしめられ, 貨幣形態に移行していく過程は, ただ物と物との関係として追求しているだけでは, どうし

てもその必然性が説明しきれないというアポリアにぶつかってしまう。

そこで「商品の物質性」の節がでてきてブルジョア社会の人間が描かれ、そこから「交換過程」（自分の欲望をみたす使用価値をもつ商品と引換えにのみ自分の商品を譲渡しようと欲する）に入る、商品所持者たちが市場で対峙する。こうした「社会的行為のみ……（が）ある一定の商品を一般的な等価たらしめる」

36) 前掲, 尾高邦雄編『ウェーバー』, 75ページ

37) 野田一夫『日本の経営』, ダイアモンド社, 経営学全集, 昭和30, 序文2ページ

39) Thomas J. Peters, Robert H. Waterman Jr, In Search of Excellence, WARNER BOOKS, A Warner Communications Co. 大前研一訳『超優良企業の条件—エクセレントカンパニー』講談社, 1983. 7, 上, 34ページ

40) T. Peter & R. Waterman, 同上

The crucial problems in strategy to a very large extent meant going far beyond to issue of organizing—structure, people and the like. So the problem distressingly circular. 4ページ

41) 大嶋隆雄『経営学における学際的統合』経営研究, 第1巻第1号, 愛知学泉大学経営研究所, 1988. 2, 43ページ

42) 野中郁次郎『企業進化論』日本経済新聞社, 1985, 120ページ

43) 前掲 Peter & Waterman, In Search of Excellence, 英文13~15ページ, 訳文, 上 50~53ページ

44) 前掲, 大嶋『経営学における学際的統合』35~36ページ

45) P. F. ドラッカー, 小林宏治監訳『イノベーションと企業家精神』ダイアモンド社, 昭60. 5, 138ページ

46) 前掲, 石井『ニューハード文明論』17, 18, 40ページ

• 例えば, インテリゼンスの高いロボット, いちいち脳にあたる中央指令所の判断を待って動作するのではなく, 腕の関節ごとに組みこまれたLSIの指令によって機敏な腕の動作が可能な分散制御型のロボットが登場するだろうと言われている。インテリジェントな情報部分を, その物体の各部の中に取り込み, フェージョン(融合)させている。NEC工作機械もそうである。

47) Lasswell, H. D., Language of Politics, 1949

48) 加藤秀俊『文化とコミュニケーション』思索社, 昭46. 5, 32ページ

49) 加藤, 同上, 42ページ

50) 加藤, 同上, 47ページ

51) Akiō Morita, MADE IN JAPAN, New American Library, 1988, 87ページ

52) 前掲, ドラッカー『イノベーションと企業家精神』

53) ドラッカー, 同

54) ドラッカー, 同

55) ドラッカー, 同

56) ドラッカー, 同

57) Kenneth E. Boulding, THE IMAGE, The University of Michigan Press, 1956, 大川信明訳『ザ・イメージ』誠信書房, 6~7ページ

(英文) When a message hits an image one of three things can happen. In the first place, the image may remain unaffected. If we think the image as a rather loose structure, something like a molecule, we may imagine that the message is going straight, through without hitting it, the great majority of messages is of this kind.

There is, however, a third type of change of the image which might be described as a revolutionary change. Sometimes a message hits some sort of nucleus or supporting structure in the image, and the whole thing changes in a quite radical way.

(8 ページ)

58) K. E. Boulding, 同

- The value image is enormously important in the effects, but remarkably obscure in its origins. Incoming messages are not admitted to the image free. At the gate of the image stands the value system demanding payment. This is as true of sensory messages as it is of symbolic messages. (50ページ)

- It must not be forgotten that the discourse must be received as well as given. and that whether it is received or not depends upon the value system of the recipient. (16ページ)

- The behavior of the organization must be interpreted as a result of the image of the executive, directed by his value system. The image is always the property of the individual persons, not of the organization. (27～28ページ)

59) 前掲, 加藤『文化とコミュニケーション』